

ごあいさつ

和歌山支部長

勝 田 晃 夫



残暑お見舞い申し上げます。
会員先生方には益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。また平素は会務運営につきまして、深いご理解とご協力を賜り心より厚くお礼申し上げます。

さて20世紀もあと4ヶ月余りとなり、いよいよIT革命（情報通信）を中心とした税理士業務の展開が必要となる21世紀が間近となりました。先日の近畿税理士会第36回定期総会では「山積する諸問題の対応と税理士法の改正に向けて始動」を本年度の事業目標とし、14項目の重点施策を掲げて、これに基づいて各部、委員会の具体的な事業計画がたてられています。当和歌山支部も会員数233名（6月30日現在）となり、最近入会された先生方は年齢30歳代が多く、次世代の後輩として育成できるような税理士会でありたいし、そのような税理士制度を確立できるよう努力したいと思います。

また支部長に選任されて第1期目の定期総会も無事終了し、各役員先生方や会員先生方の暖かいご支援により、これといった質問もなく信任していただき厚くお礼申し上げますと共に反面、税理士会の行事には参加はするが案外この業界に魅力を感じない、期待もしない、無関心、不熱心な会員先生方が多いのではないかと危惧する気持ちをいただいております。何分我々の業界には、政治連盟、税理士協同組合、正風会、桜美会、青年税理士連盟、コンピューター利用に伴う会等、各種の任意団体が多く、どの会が自分の事務所経営にとって一番適した、また有利な会であるかにより各会員先生方は非常に知的に行動されているのではないだろうか等と考えてさせられます。

このような状況化の下、新聞紙上では保険金目的による奈良の長女薬殺未遂事件、17歳の少

年が実母をバットで撲殺する事件、ストーカーによる殺人等、本来常識では考えられない、万物の霊長である人間として考えられない事実が報道されています。経済界に於いても、雪印集団食中毒、金融機関を除けば過去最大の負債を抱えた老舗百貨店「そごう」が本年4月から施行された「民事再生法」の適用申請・全国的な中小企業の構造的な不況等、日本経済の成長率は一段と低迷し、完全失業率4.7%等景気の回復は鈍く、先行きの見透しは悪く、我々の関心はそちらに向けられ、業界のことなど考える余裕がないのかも知れません。

こうした非常に大きな時代の変化の中に於いて支部長として微力ですが、残された任期を今後対外活動を積極的に展開し、税理士制度及び業務の社会的認識を高め、職域の確保・拡充を図るため努力したいと思いますので、会員先生方より一着想のご協力、ご支援の程、お願い申し上げます。

終わりに臨み、会員先生方の益々のご健勝とご事業の発展を心からお祈り申し上げます。



着任のご挨拶

和歌山税務署長

小 田 誠 亮



例年になく厳しい残暑が続いておりますが、近畿税理士会和歌山支部の諸先生方におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

近畿税理士会和歌山支部並びに会員の皆様方には、平素から税務行政につきまして、深い御理解と格別の御協力を賜り、紙面をお借り致しまして、心より厚くお礼申し上げます。

私は、この度の人事異動によりまして和歌山税務署長を拝命し、過日着任いたしました。

和歌山税務署の勤務は、初めてでございますが、古くは徳川御三家のひとつ紀州藩五十五万五千石の城下町として栄え、今なお悠久の時間が流れる町である、豊かな歴史と伝統文化にあふれた御当地に勤務できることを、大変光栄に思っております。

ところで、近年の経済取引の広域化・複雑化、国際化のスピードがますます加速している一方で、パソコンやインターネットの普及拡大に伴い、税務を取り巻く環境はもちろんのこと、IT革命に象徴される社会全体の高度情報化やペーパーレス化が急速に進展しております。

これまでも、情報化に対応して納税者の利便性を図っていくためインターネット上でのタックスアンサーの利用、帳簿書類の電子データによる保存制度の導入などが行われるようになり、さらに進んで、納税申告を、現在の書面の提出による方法に加え、電子データの形で送信する方法による電子申告制度の導入に向けた具体的な取組みが進められております。

さらに、税務の職場も大きく変わろうとしており、来年1月には中央省庁等改革の実施が、4月には情報公開法の施行が予定されております。

こうした状況の中で、税に携わる私どもといたしましては、「適正・公平な課税の実現」と

「期限内収納の確保」という私どもに課せられた使命の達成を図るため、経済情勢に即応した署務運営に配意するとともに、21世紀に向け新しい目で物事を見つめ、状況を的確に捉えながら、納税者の皆様方から信頼される税務行政の確立に努めなければならないと考えております。

しかしながら、これらのことを実現するためには、私どもの力だけでは十分ではなく、税の専門家として豊かな経験と高い見識をお持ちの税理士先生方の御理解と積極的な御協力が是非とも必要であります。

近畿税理士会和歌山支部におかれましては、常々税務行政に深い御理解をもたれ、税知識の普及とともに納税道義の高揚等に積極的に取り組んでいただいていることは、誠に心強く、その御努力に対し深く敬意を表する次第であります。

今後とも、貴支部との連携を密にし、諸先生方の御意見を十分に受け賜りながら、税務行政の円滑な運営と執行に努めて参りたいと思しますので、なお一層の御支援と御協力をよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、近畿税理士会和歌山支部の益々の御発展と会員の諸先生方の御事業の益々の御繁栄と、御健勝、御多幸を心から祈念いたしまして、着任の挨拶といたします。



和歌山税務署新任幹部ご紹介（敬称略）



署長 小田 誠 亮



副署長 川崎 万喜生

新 任	氏 名	旧 任
署長	小田 誠 亮	局 課一資産税 課長
副署長	川崎 万喜生	茨木特別調査官（資産）
特別調査官（総合調査）	中塚 常 治	局 総相相談官（和歌山）
総務課長	檜 本 正 澄	局 調二調総総括 主査
特別徴収官	木 場 厚	堺特別徴収官
特別調査官（所得）	水口 英 男	東住吉特別調査官（所得）
個人課税第2統括官	中村 文 昭	泉佐野総務課長補佐
個人課税第5統括官	岡 泰 彦	大審審査官
個人連絡調整官兼総括上席	米田 昌 由	城東個人総括上席
特別調査官（資産）	西井 護	尼崎資産課税第2統括官
資産課税第2統括官	松並 智 敏	富田林総務課長補佐
法人課税第1統括官	彦坂 好 成	局 課二法実務指導官
法人課税第2統括官	岸 部 輝 一	局 総総総務2 係長
法人課税第4統括官	阪口 章 和	局 課二統調 主査
法人連絡調査官兼総括上席	横山 禎一郎	局 総事電計1 係長
酒類指導官	山口 将 人	局 課二酒企業 係長

恩を知る

岡田将生



恩という言葉には恵み、情けなど恩着せがましい印象があって、どうも私は好きになれなかった。

恩を着せて恩を返させるのは、相互授受の思想であって打算的で何となくいやらしい。

ところが早春の或る日京都の浄土宗総本山知恩院に参詣したときのことである。

高僧から法然上人の伝記を聞かせていただき、知恩院の由来について説明を受けた。それは

「恩を返せ」というよりは「なされたことを知る」ことの方がより大切であり「恩を知る」意味から知恩院と命名されたのだと。

なるほど恩という漢字は 因 プラス 心 からなっており「原因を心にとどめる」ことを表現している。

恩返しをすればいいといった考え方では、いただいた恩を小さく見積り自分が返したものを過大に評価することにもなりかねない。

これだけ返せばもう十分だろうと考えるが相手はまだ十分に返してもらっていないと思い相互関係がギスギスすることだってあり得る。

「恩を知る」ことは相手が私に何をしてくれたか、その苦勞を如実に知ることである。そうするとかならずや相手に感謝の心をもつこととなる。

感謝の心さえあれば、私どもはまちがいなく

相手を幸福にできるからである。

私の好きな言葉に

感謝の大地に花がさき不平の嵐に花は散る。

税金—その用途—

片山 明



今年も又暑い夏がやって来た。あの終戦の日も暑い日であった。あの時の記憶も国民からしだいに忘れられて行くのであろう。ひたすら国を想い祖国の為と信じて命を捧げた二百三十二万余柱の英霊に対する尊崇の念も次第に薄れつつある。我々の年齢の者で彼らと共に軍隊生活を送った者として真に悲しい事であり哀惜の念に堪えない。

さて古来日本人はその名を惜しみ恥を知る事を最大の美德とした国民であった。あったと言うのは今の日本人はそれらの心情を幣履の如く捨て去ってしまったからである。かつてアメリカの文化人類学者ルーズベネティット氏は日本文化のメタファーとして挙げた「菊と刀」に表象される恥をこそ忌み嫌う民族の気質が今は全く失われてしまったのである。これについて石原慎太郎氏は「しおれた菊、錆びた刀」と表現して嘆いている。これは個人だけの問題ではなく日本と言う国も又その通りで国の誇り、祖国の名誉等と言うものは最早地に落ちたと言っても過言ではなく、その姿は近隣諸国のいわれなき恫喝に平身低頭し土下座外交を繰り返す政治家を見れば明らかである。又政府与党が国民の危機に際して如何にしてもこれを救わんとする信念の欠如しているかは、かの阪神大震災の時、日本憲政史上最悪最低最悪と言われた内閣のその首相が、自衛隊不必要論者である所からあの阿鼻叫喚の中、自衛隊出動命令を躊躇しその被害を予想外の大きなものにしてしまったのを見ても明らかである。

我々国民が税金を納めるのは、国家の安全と

国民の生命、財産を守って貰う為である。某国によって日本人が拉致されたことが判明した時全力を挙げて自国民救出に動くのが国家と政府の責務である。しかるに政府与党は拉致問題を棚上げして、その国の米を支援し、両国間の交渉再開を急ぎ今もその姿勢を変えず又米を支援しようとしている。国家としての名誉も面目も踏みにじって尚この態度を変えようとしめない。正に税金の無駄使いの最たるものである。

或いは不要不急の公共事業に天文学的な資金を投じ、又大企業の放漫経営による倒産の救済に税金を当てようとする等、日常の新聞等で見ても政治家や高級官僚による税金の無駄使いは目に余るものがある。

古来日本人は納税に際し、その不公平や税制の矛盾を言いたてるが、その使い途については、案外無関心であるという。我々が顧問先の委嘱を受け、税金を計算した場合殆どの納税者は納得し、資金繰りに苦しくても皆納税する。我々の顧問先は殆どは中小企業であり、優良企業と雖も、納税の為に銀行より借入れをせねばならぬ場合も多く、又零細企業であれば納税資金の捻出に苦慮するのが通常であり現下の不況下に於いては尚更である。

この様にして納めた税金は国家国民のために正しく使うのが為政者の責務である。しかるに、あたかも湯水の如く無駄使いされては納税者に対する甚だしい裏切り行為であると言わねばなるまい。我々はもっと税金の使われ方について監視しその用途を見極める必要があるのではないか。

無論個人々々は無力であり、言うは易く行方は難いのは百も承知しているが、一人一人が真摯に気概を持って結集すれば必ずやその成果が表れるものと確信する。

ここで話が少し横道にそれるが敢えて書いておく。中曽根康弘元首相の新著「二十一世紀日本の国家戦略」の中で最も魅力ある記事と思われる指導者論に「政治は何で動くか、総理大臣の能力、見識、迫力です。国家のために身を捧げる。自分の生涯を懸け、政治生命を懸けて身を捧げる。そういうような総理大臣の信念と迫力がまずあって、それが各大臣に移り官僚や党の役員に移っていくのです」この言葉の重みを痛感するだけに、この言葉通りに政治の現状を

打破し国の為に命を捧げると言う政治家の出現を期待したい。政治家が目覚めれば税金の無駄使い等もやがて自然消滅するはずである。

夏来たり、秋過ぎ冬が来る。この国が国としての自尊心を取り戻し、国民が国を想い恥を知りその名を惜しむ時代が果たして来るのであろうか。菊が生き生きと咲き乱れ、刀が煌々と光りをとり戻す日の来るのを望んでやまない。

平成12年8月16日

旅の思い出

山中 静



昭和27年開業後はスクーターに乗っていたが、31年に県自動車学校に南方勇先生、(故人)と共に通って免許をとり、しばらくは業務上利用する程度であったが、子供が就学する様になると家族サービスとして春休み、夏休みにドライブ旅行する様になった。

高速有料道路が西宮一栗東が開通した時代であり、一般道路を走ったが今と違って、車も少なく、至って利便であった。先ず西国三十三霊場巡り、次いで四国八十八霊場参りを初めました。44年よりは、九州、中国、47年夏には北海道、48年夏には東北を巡り、沖縄を除く全国を走破する事が出来ました。

その間九州の高千穂より山並みの道を南に向かって、通行止めを知らずに走り、行き止まりに逢って、引き返し、旅館に深夜に着いた事や、鹿児島国分の高等学校に立ち寄り、終戦時、海軍少尉で空襲に遇った昔を偲んだ事が印象に残っている。九州は旅行の機会が多いが、国内旅行ではやっぱり北海道と東北が何度行っても良い。北海道は舞鶴よりフェリーで30時間で小樽に着いた。小樽から南へ、霧の中山峠を越えて函館へ、夜景を眺めて一泊、富良野のラベンダー畑の辺で第二夜旭川から層雲峡で第三夜、翌朝黒岳の残雪を掬い、サロマ湖を経て網走にて

第四夜、原生花園を経て、摩周湖へ、幸運にも霧が次第に晴れ、全容を遍く眺められた。川湯温泉にて第五夜、翌朝霧多布岬より北方領土の方を眺め、西へ引き返し、鶴公園、襟裳岬、日高牧場を経て、登別温泉で第六夜。翌日は支笏湖を経て札幌見物後、夜行のフェリーで小樽から敦賀へ帰る。雄大な自然の中、真っ直ぐに延びた道を走る快適さは文字では言い表せない。48年夏最後に残った東北へは自宅を深夜12時に出発、6時に東京、日光見物して白河で第一夜、福島県の野口記念館、会津若松城、色鮮やかな五色沼を眺め、丘温泉に泊まる。翌朝仙台の七夕祭りの飾り付けを通り抜け松島海岸に出て、瑞巖寺に参拝、牡鹿半島を走り、金華山を眺め、引き返して三陸海岸のリアス式海岸を経て気仙沼へ、陸中に入り、一ノ関に泊まる。翌朝中尊寺に藤原氏の栄華を偲び盛岡に入る。小岩井農場を見学し、奥入瀬溪流に車を止め、一息をつく、十和田湖を巡って八幡平で一服。田沢湖は高台から遠望し、大鰐温泉に着き夕食後、青森市に走り、勇壮なねぶた祭りを鑑賞し、深夜宿に帰り熟睡する。翌朝弘前城とねぶた会館見学、五能線伝いに日本海に出て男鹿半島にて泊まる。翌朝竿燈祭りの秋田市を通り、日本海沿いに酒田に着く。東に向かい新庄を経て、山形市に入り花笠踊りを鑑賞してかみのやま温泉に泊まる。翌朝蔵王に上り、徒歩とのケーブルを使って蔵王を満喫した。山を下り又西へ日本海に出て、直江津に泊まる。翌日日本海伝いに無事帰宅した。

「能登一路」温泉旅行

森 脇 敏 夫

研修・慰安・親睦様々な思いを胸に、本年度の支部旅行も税理士会館前を定刻にスタートした。

今年の旅行は、すこしでも多数の方に参加していただきたい、また会員の皆様の多数意見を反映するためにとの思いから、事前にアンケートを実施した結果により昨年に引き続き業務対策委員会と厚生委員会との共同実施となった。おかげさまで定員いっぱいの30名による能登方面への研修旅行となった。

第一の目的地「長浜黒壁ガラス館」までの2時間余り、支部長の挨拶にはじまり添乗員の案内等が終わり、バス旅行恒例の小宴会が始まるかと思いきや、ほとんどが参加者同士の懇談にひたっていた。

小休憩を挟んだ後、「黒壁ガラス館」に到着。和歌山ではみられない整然とした町並み、手作りガラス特有の輝き、そして一番印象的だったのが出発して3時間しか経過していない段階で会員のほとんどが両手にお土産らしきものを抱えていた。これから何ヶ所も観光地周りをするのに、これから先が思いやられると、ついいらぬ心配をしてしまう。

琵琶湖畔のホテルでの昼食も終わり、一路宿泊先へバスは再出発した。このころからあちらこちらで小宴会が始まりだしたのだろうか。途中、「千里浜なぎさドライブウェイ」を経由した。数キロにわたる海辺を走る砂浜でできたドライブウェイだ。ご存知ない方は、片男波や浜の宮の砂浜をバスが走る姿を想像していただきたい。観光バスが一転ランドクルーザーに変身したかのような錯覚に陥ってしまう。

さて、定刻どおりに宿泊先である和倉温泉「加賀屋」へ到着。旅行の目的も、研修から慰安・親睦へとかわり温泉気分を満喫し、宴会も盛り

上がる。ある高齢（失礼）の先生が一言「こんな機会でなかったら若い先生方との交流がないな！」この一言で旅行の目的の一つは達したかと、担当委員としては自己満足にひたる。宴会も盛り上がりの余韻を残したまま終わり、各グループ趣味にこうじる。マッサージをうけるもの、ショーを観るもの、カラオケで盛り上がるもの等、全員健全な行動であったのはいうまでもない。

二日目、日本海の手産物店でまた手荷物を増やし、一行は「巖門・能登金剛」へ向かった。和歌山雑賀崎そっくりの岬でひとときを過ごした後、和歌山支部を代表して一行が「気多神社」にてお祓いを受ける。昼食は、おなじみの金沢「兼六園」、この頃から雨が降りはじめたが雨の兼六園もなかなか情緒あるものであった。最後の目的地は、「宝石館」。入館する前にA先生と買物はしないと約束したはずが、水晶やトルマリン石に魅せられて、いや口の上なおじさんにのせられてついつい大きな買物をしてしまったのは私だけではなかった。

あとは無事和歌山へ帰り着くだけ。名神高速、近畿道とバスは走る。皆お疲れかと思いきや、最後まで懇親は続いた。和歌山駅にたどり着いたとき、思わず担当副支部長と握手する。無事研修旅行が終了したことがうれしかった。これも運転手さん、ガイドさん、添乗員さんに恵まれ、また参加された先生方のご協力があつたからこそだと心から思った。参加いただいた先生方、二日間にわたるバス旅行お疲れさま、またありがとうございました。



新入会員等ご紹介 (敬称略)

入 会



ミズキ ミノル
水城 実

平成12年2月24日
(事務所)
和歌山市西汀丁26和歌山県経済センタービル4階
速水慎一郎事務所内



フルタ ノリコ
古田 倫子

平成12年7月24日
(事務所)
和歌山市黒田48-2 SKファーストビル2階
大西省悟事務所内



ミズキ ヒトミ
水城 斉美

平成12年2月24日
(事務所)
和歌山市薬勝寺285
木野久行事務所内

転 出

斉藤 健一 (粉河支部)



ミナカタ エリコ
南方 江里子

平成12年2月24日
(事務所)
和歌山市松ヶ丘2-1-6

退 会

鈴木 和男 (廃業)
古川 幸治 (死亡)

◆◆◆◆◆ 編 集 後 記 ◆◆◆◆◆

まだまだ暑い日が続きますが、いかがお過ごしでしょうか。

会員先生方におかれましては原稿依頼にも快く応じていただき、「五十五万石」を無事に発行できたことに厚くお礼申し上げます。

さて、20世紀も余すところ約4ヶ月となりました。時の経過は時代の流れとともに早さを感じさせているようです。21世紀を目前として、規制緩和等、会計ビックバンおよびIT革命と目まぐるしい時代は変革しているようです。こうした変革に迅速な対応が要求されるのですが、

トピックなことばかりに捕われて「心」のつながりが希薄にならないように気をつけなければならぬと思われまます。

21世紀はIT革命等と「心」の時代に進むのでないかと、今回の会員先生方の原稿からも感じられたような気がしました。

今後とも広報活動へのご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

広報委員 山 石倉 木村